

# バスキア展



山本 洋子

去年の秋に高校時代の友人四人と集まる機会があった。一番最後に会ったのは、長女が産まれたときだから、実に十六年ぶりの再会となった。いつも会いたいねと年賀状のやりとりだけで月日が流れ、私以外の三人はまだ独身でいる。集合の声をしてくれたのは、娘時代に一緒に海外旅行もした友人の通称「うす」である。

友人三人のなかの一人が、成人してから自律神経失調症でながいこと闘病していることもあり、集合場所はその子の家の最寄り駅となった。

久しぶりに会う級友たちは、懐かしくもあり、記憶のなかの制服の面影はそのままに流れる月日は嘘をつくこともなく、皆それなりに大人になっていた。

西武線沿線沿いの駅前にはこれといってゆつくりと食事をとる店もなく、あまり歩くのも疲れてしまうとのことで、近くのモスバーガーで昼食をとった。

お互いの近況報告をするなかで、うすが「私、バスキア展に行きたいんだよね」とポツリとつぶやいた。バスキア展といえば、あの元 zozo 社長の前澤友作が百二十三億円で所持して特別展示をしている絵画展である。ぼんやりと絵画展のことは知っていたものの、うすのつぶやきで俄然、興味が出てきた。数日後、私は公休日以外は休みがとりづらいついと言おうすの休みにあわせて仕事を休み、一緒にバスキア展へ行く約束をした。

当日、六本木のアマンド前で待ち合わせ、六本木ヒルズ森タワー五十二階へと向かった。実は昔にもこんなふうにくすと二人で、当時百万人以上の来場者があつたと記録されているバーンズコレクションの絵画展へ来たことがある。まだ二十二くらいだった私たちは、国立西洋美術館の長蛇の列に圧倒されて、並ぶのをどうしようかと渋っていると、なんと列を警備している若い男性が、私たち二人を優先的に前へと案内してくれたのだった。いまして思えば、私たちくらいの若い年ごろの娘が鑑賞しに来るのが珍しかったのだろうか。あの時代はまだどこか世の中が寛容だったこと、そしてやはり、若さは財産なのだとこの歳にして思う。

チケットを買い、専用の音声ガイド機器を受け取り、いざ展示会場へ。ニューヨークを拠点として活躍したバスキアの作品群は、絵

画というより正真正銘のアートだった。

写真撮影がオーケーな作品も多く、進んでいくうちにあの前澤氏所持の作品が大きく飾られていた。「これが百二十三億円・・・」鮮やかな水色をバックにダイナミックな構図で描かれた作品を前につかさずスマホで撮影をした。

かなりの展示数を一人でゆつくりと歩いてみてまわった。その後、昼食をとろうと会場を後にし、土地勘のない二人はビルを出たところの地下の飲食街にあるとんかつ屋へ入った。昔と違うところは、久しぶりだからと小ビールで乾杯をしたことだろうか。

それから食事を後にすると、腹ごなしに歩こうとうすが言い出し、六本木から四谷までひたすら歩かされたのだった。昔からどこかへ出かけると歩かされるところは今でもブレずに変わらず、嬉しいような迷惑なような微

妙な心持で歩いた。明治記念館を脇に、赤坂御所のまわりをひたすら歩き、学習院初等科を確認し、無事に四谷駅へと到着した。私はこのまま中央線で国立まで帰ると告げると、彼女は地下鉄で帰るとのことです別れた。かなり疲れたが、久しぶりに昔のように二人で非日常を堪能し満足しながら電車で揺られた。

国立駅からの帰り道、空を見上げると、白っぽい三日月と一番星がつかず離れずの距離で瞬いていた。二つとも全く違うけれど、同じ空の世界にどちらがかけても成り立たない。まるで私とうすみたいだなとぼんやり思いながら家路を急いだ。

